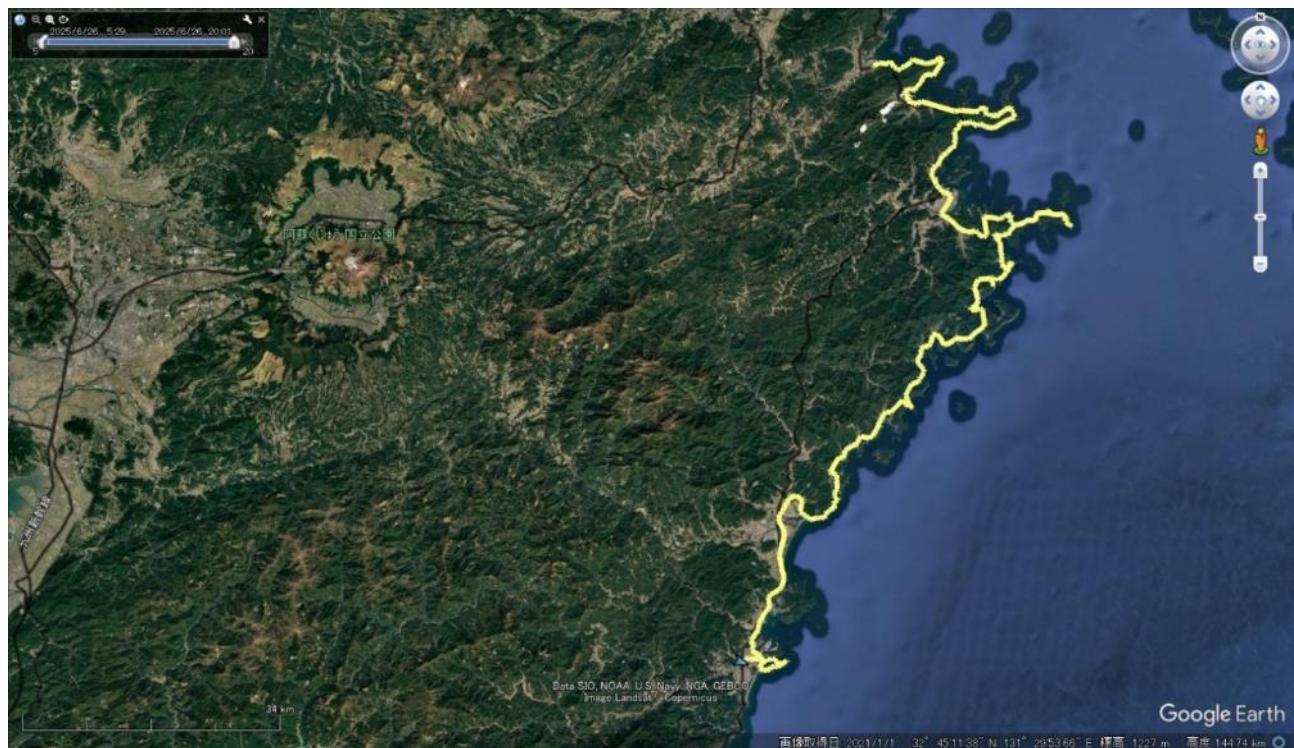


☆4日目（6月26日）：臼杵から日向まで



行程地図（4日目）_記録 OLYMPUS TOUGH TG-6

早朝パンと野菜ジュースで朝飯を済ませて出発。雨は降っていないが、曇天。昨日見なかった臼杵駅前の石仏レプリカを見てから、県道217号で臼杵港を通って、大泊から県道707号で岬を回り、徳浦までの岬めぐりコースへと進む。



写真 76. 早朝のJR臼杵駅



写真 77. 石仏（大日如来像）のレプリカ

臼杵港には、宇和島の八幡浜行きのオレンジフェリーが停泊していた。フェリーターミナルの横に緑地公園があり、今年の8月1日にオープン予定のお魚型テントのある面白そうな子ども広場が出来ていた。

なかなか天気が回復しない。曇天続き。



写真 78. オレンジフェリー

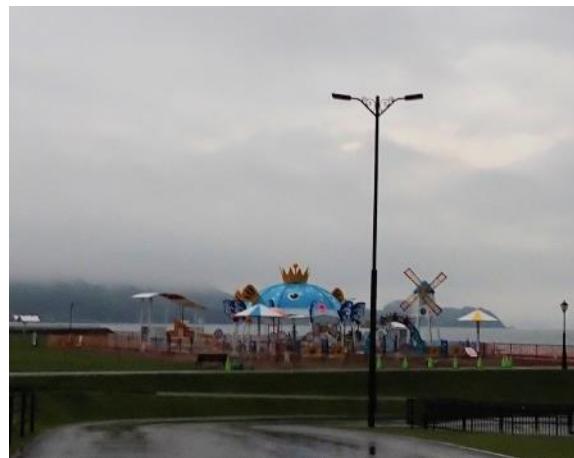


写真 79. お魚テントの子ども広場

大泊港から楠屋崎方面に進むと「海賊泊」という面白そうな場所があるのだが、県道からの入り口には鎖が掛かっていて一般車通行止めとなっていたので、県道から見下ろして写真だけ撮った。確かに海賊が隠れそうな入り江である。その先県道は、楠屋崎の先端まではいけず、道幅が狭くなつて山中を海まで抜けることになる。



写真 80. 「海賊泊」を見下ろす



写真 81. 細くなる県道 707 号

また海岸線に戻ってしばらく走ると「堅浦工場展望スポット」と言うところがある。対岸のセメント工場などがきれいに見えるスポットなのか、昼間に見ても感動のない景色だった。



写真 82. 「堅浦工場展望スポット」

岬から海沿いを走り、津久見市で国道 217 号に入り、また JR 日豊本線と並走する。入り江沿いの変な街路樹を抜けて、清水橋で JR815 系の普通列車に抜かれた。この橋の欄干には、童謡の「みかんの花咲く丘」の歌詞が刻まれている。津久見市が柑橘類の一大産地だからであろう。ちなみに、フォークソングの名曲と言われている「なごり雪」の作者の伊勢正三が津久見市出身とのことで、津久見駅前には「なごり雪」の歌碑が立っているそうである。今回は、駅には寄らず、見ることが出来なかった。



写真 83. 入り江沿いの変な街路樹



写真 84. 清水橋の歌碑と日豊本線の電車

網代港を過ぎて県道 611 号に入り、天候が少し怪しくなってきたので、江ノ浦へは行かず、荒代トンネルでショートカットして、「つくみイルカ島」というイルカとの触れあいパークの前を通過した。



写真 85. 荒代トンネル出口で県道 611 号に戻る



写真 86. 「つくみイルカ島」入り口

四浦展望台と河津桜展望所に寄って、県道 541 号で大浜を回り、岬の南側を戻る。残念ながら展望所は靄で眺望は効かなかった。勿論、河津桜も今は咲いていなかった。上浦まで来て国道 217 号に戻ると、また JR 日豊本線と並走する。ちょうど 787 系電車が通過するところだった。昔特急に使われていた車両で、格好いい。



写真 87. 河津桜展望所



写真 88. 787 系電車

すぐ先の浅海井港にバイクを停めて、「豊後二見ヶ浦」を見に行く。やはり、日本人は岩と岩を「しめ縄」で繋ぐのがお好きなようである。



写真 89. 浅海井港



写真 90. 豊後二見ヶ浦の入り口



写真 91. 豊後二見ヶ浦



写真 92. 813 系大分行き

佐伯市内に向かって走っていると、JR の 813 系大分行き列車とすれ違った。古そうな電車だった。佐伯市内はグネグネと海岸線を進み、県道 615 号の鶴御崎トンネルを通って岬の北側にでて、海岸線を「丹賀砲台園地」まで走った。

9時30分開園の所、9時に着いてしまったが、親切に入ってくれた。入園料は、200円。勿論駐車場は1番乗り。地面に引かれた白線は、砲台の実物断面図を描いたもので、駐車枠では無かった様である。



写真 93. 鶴御崎トンネルの出口



写真 94. 「丹賀砲台園地」の受付



写真 95. 駐車場の不思議な白線



写真 96. スロープカーで上り下り

ここは、豊後水道を守るために戦艦「伊吹」の後部砲塔を移設した砲台であったが、試射時に砲内誤爆して大勢の犠牲者を出す惨事が起きたところである。駐車場からスロープカーで砲台跡まで登ることが出来る。砲台跡には爆発で砕けた壁面などが残されていて、天井は遺構保護用のドームで覆われている。



写真 97. 砲台内部の爆損した壁と、屋上に出る螺旋階段



写真 98. 遺構の保護用ドーム



写真 99. 砲台が守ろうとした豊後水道

その他園内には、砲弾をあしらった慰靈碑や海中から出てきた「二式大型飛行艇」のプロペラなど色々と屋外展示してあった。九州の戦争遺構は関東の房総半島にある戦争遺構より、生々しさを感じるのは何故であろう？



写真 100. 砲弾をあしらった慰靈碑



写真 101. 「二式大型飛行艇」のプロペラ

引き続き、県道 604 号を東に進み、宮ノ浦港を過ぎると、「元の間海峡段々展望所」が有る。向いの大島との間の元ノ間海峡を望む展望所であるが、何故このような階段状なのは分からぬ。

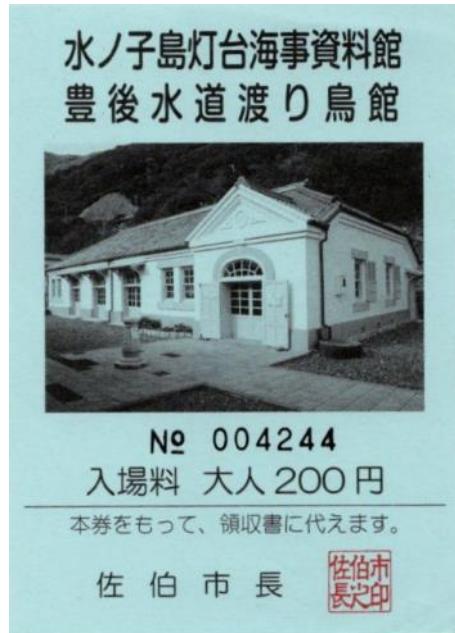


写真 102. 「元の間海峡段々展望所」



写真 103. 元ノ間海峡

引き続き県道 604 号を東に進み、途中「下梶寄海水浴場」へ降りていくと、「水ノ子島灯台海事資料館」と「豊後水道渡り鳥館」がある。



チケット 02. 「水ノ子島灯台海事資料館」と「豊後水道渡り鳥館」チケット

かつて沖にある水ノ子島灯台に宿直があった時代の交代要員の宿舎を資料館として残している。当時は 3 家族が住んでいたとのこと。こんな最果ての資料館に平日訪れる人も居なく、館長さんと思わしき方が、丁寧に説明しながら案内をしてくださいました。

1986 年に映画「新・喜びも悲しみも幾年月」の撮影で使われたのをきっかけに資料館として開館することになったそうである。



写真 104. 水ノ子島灯台海事資料館の前



写真 105. 豊後水道渡り鳥館

敷地内には、かつて村民の集会所に使われていた建物もある。沖にある水ノ子島灯台は、天気がいいとここから見えるそうだが、今日は靄が掛かっていて見えない。手前の岩にある先ノ瀬灯台がちょうど見えた。

館内には、灯台や灯台守の生活が分かる資料が沢山展示してあった。随所に、当時の最先端の技術で作られた設備の痕跡が有り、興味深かった。



写真 106. かつての集会所



写真 107. 灯台の方角



写真 108. LED化前のレンズ



写真 109. 写真 110. 「新・喜びも…」の出演者とロケでの使用モデル



写真 111. 通信省時代の瓦



写真 112. 五色エビも獲れた



写真 113. 風化した機械



写真 114. 渡り鳥館の看板

渡り鳥館は、水ノ子島灯台に衝突して死んだ渡り鳥をすべて回収し、はく製にして展示している珍しい博物館である。この衝突事故は、渡りのルート上の海上に孤立している特異な条件が揃っている水ノ子島灯台にだけに起こる悲劇のこと。1日に数百羽衝突したこともあるそうである。

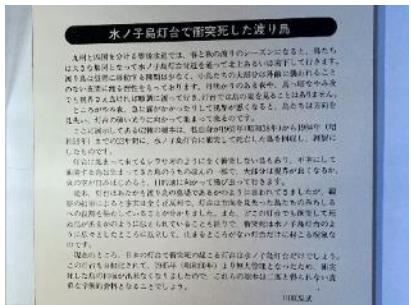


写真 115. 渡り鳥館の由来



写真 116. 激突死した鳥 (1)



写真 117. 激突死した鳥 (2)

これら資料館の外壁の石垣は、特に人の目に付く階段の近くだけだが、石が精密に削り積み上げられた、隙間のない美しいものとなっている。

資料館では、B4 サイズ 10 ページの豪華なパンフレット「Evolving as it is, silently Peninsula of "TSURUMI"」という小冊子を頂いた。



写真 118. 渡り鳥の飾り



写真 119. 資料館の石垣



写真 120. 織密な石組み



写真 121. 歴史を感じさせる望遠鏡



写真 122. 豪華な鶴見半島小冊子

ここからは、いよいよ日本本土最突端 16 岬のひとつ九州最東端の鶴御崎に向かう。駐車場まではすぐに着いたが、岬と灯台まではちょっと歩きます。結構歩きにくい遊歩道。もう、雨の心配もなさうなので、合羽は脱いでいく。



写真 123. 鶴御崎駐車場



写真 124. 岬までの遊歩道

まずは、灯台に到着。先ノ瀬灯台、水ノ子島灯台と、ここ鶴御崎灯台の 3 つの灯台が並んで見える場所は全国でも珍しいそうだ。今日は、霧で水ノ子島灯台が見えないのが残念。徒歩で行ける九州最東端は、灯台の先なので、もうひと歩きする。

次ページ (04_2) https://kurotora2.michikusa.jp/event/2025_Kyushu/2025_kyushu_04_2.pdf